

# 早坂久之助司教の米国訪問の背景を追って

濱田 洋子

Tracing the background of Bishop Januarius Hayasaka's visit to the U. S. A.

Yoko Hamada, ICM

---

本稿は、日本人最初の司教ヤヌワリオ早坂久之助がローマでの叙階後、欧州歴訪を経て米国訪問が実現し、予想だにできなかった盛大な歓迎を受けた背景を、米国カトリック教会の歴史的背景と米国カトリック教会の中に築かれていた早坂司教の国際的な絆を、米国に残されている関係書簡、資料、新聞記事などを通して紐解き考察する。

**Key Words:** [日本人最初の司教] [ヤヌワリオ早坂久之助司教] [メリノール宣教会] [教皇使節フマソニ・ビオンディ大司教]

---

(Received September 24, 2019)

## はじめに

ヤヌワリオ早坂久之助司教は、1927年10月30日、王であるキリストの祝日に日本人最初の司教として、聖ペトロ大聖堂において、教皇ピオXI世によって叙階された。その後ヨーロッパ諸国を歴訪し、1928年2月17日フランスの客船De Grasse (デ・グラッセ) にてニューヨークに入港した。米国での滞在は1ヶ月におよび3月17日バンクーバー (カナダ) からEmpress of Canada (エムプレス・オブ・カナダ) で帰国の途についた。横浜入港は3月29日のことである。

1911年のメリノール宣教会Walsh総長との出会いからその後の交流書簡、欧州歴訪中のヨーロッパから米国カトリック教会への報告記事、そして1ヵ月におよぶ早坂司教の旅程と歓迎の詳細の記録は、Maryknoll Mission Archives (メリノール宣教会本部アーカイブ: Maryknoll, New York) とAmerican Catholic History Research Center (The Catholic University of America: Washington, D. C.) に多く収集されている。また早坂司教が訪問した大学と神学校、各教区アーカイブ、教区及び地域の新聞、ロスアンジェルス、サンフランシスコ地域で発行されていた日本語新聞にも記事やスピーチ原稿が載録されている。特にMaryknoll Mission Archivesには、1911年6月10日の司祭叙階の記念のカード、その後のメリノール総長Father James A. Walsh (1933年司教叙階)、また他の会員との往復書簡が多く残されており、交流

---

\* 鹿児島純心女子短期大学非常勤講師 (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

の深さを物語っている。American Catholic History Research Centerに残されている文書は、the National Catholic Welfare Conference (NCWC News Service) のローマ駐在の通信員 Msgr. Enrico Pucciから送られている報告の新聞記事で、日本人最初の司教叙階を祝い歓迎するバリ、ベルギーでの様子を詳細に伝えている。これらの記事から、アメリカの教会が日本最初の司教叙階を注視していたことが伺える。

しかし一方、司教叙階公式発表の早坂被選司教にとって、日本を出発時は、アメリカ訪問が決まっていたわけではなかったようである。1927年7月の司教任命発表の後、8月18日付のメリノールWalsh総長からのお祝いの手紙届いている。その返礼の中に、早坂被選司教は、“On my home way, I may pass through America, so that I am sure to see Fr. Walsh at Maryknoll. (原文のまま) (帰国の際にメリノールであなたにお会いできるようにアメリカを経由するかもかもしれません。)”<sup>(1)</sup>と8月21日付けで書き送っている。さらに、昭和3年1月29日付のロスアンジェルス地域発行の羅府新報にも「米國を経由する予定ではなかったが、日米人加特力(カトリック)信者の懇望により米國を訪問することになったのであって紐育加特力本部にては沿岸の日本人のために羅府桑港及びシヤトル等を歴訪する様日程を作ることとなるであろう。」という記事が記載されている。<sup>(2)</sup> 同新聞2月19日付では、滞米期間について「日本の4月8日の復活祭に間に合ふやうに帰朝するので従って當地の滞在期間も短縮されるとの事」との続報が報じられてる。<sup>(3)</sup>

つまり9月1日の日本からの旅立ちに際し、アメリカ訪問の強い希望を持ちながら、帰国の旅程は確定されていなかったようである。一方米國カトリック教会、米國西海岸の諸都市の日本人教会関係者の間では、早坂司教の歓迎準備が着々と進められていたことになる。1924年移民法の成立後の日本人移民排斥運動の困難な時に、日本人カトリック・コミュニティは、牧者としての「日本人最初の司教」自らの手から洗礼と堅信の秘跡を受け、講話等を通して信仰生活を深める機会とすることを希望していたのである。

本稿では、早坂司教米國訪問実現に関して、1. 米國における早坂司教歓迎実現の歴史的背景 2. メリノール宣教会創立者と早坂司教の出会いの経緯とその後の交流、3. ウルバノ大学時代の恩師、教皇使節フマソニ・ビヨンディ大司教(当時、後に枢機卿)と10余名の学友との17年ぶりの再会を残されている資料から探ることとする。

## 1. 米國における早坂司教歓迎実現の歴史的背景

プロテスタントの精神的遺産と伝統を継承しているアメリカで、カトリック教会は「諸外国からの移民の教会」として、多くの苦難を耐えてきていた。19世紀半ば頃になると、高等教育機関、Fordham University (ニューヨーク、1841年創立、イエズス会) The University of Notre Dam (インディアナ、1842年創立、Holy Cross会)、The Catholic University of America (ワシントンD. C., 1887年創立、アメリカ・カトリック司教協議会立)<sup>(4)</sup>等が創立され、さらに女子修道会も加わり、増加するカトリック移民、急成長を続けるカトリック共同体の教育、福祉・医療の分野に貢献し始めた。やがて、the National Catholic Educational Association (NCEA, 1904)、the Catholic Hospital Association後にthe Catholic Health Association (1915)、the

National Conference of Catholic Charities (1910) の新しい協会・団体が組織され、それぞれの働きが強固なものになり、増加するカトリック共同体の教育的、社会・政治的な向上に寄与することになった。1917年、アメリカ司教団は、第一次世界大戦に従軍しているカトリック者の支援、カトリックとして一致して愛国心を表すのためにthe National Catholic War Council (NCWC) を組織した。さらに、同司教団は、1919年の教皇ベネディクトXV世の「平和と社会正義」のために働くようにとの要請に答えて、1922年the National Catholic Welfare Conferenceを創設し、教会が教会であることに加えて、社会的な機関であることを反映し、アイデンティティと信仰の表現を明らかにすることに努めた。

1900年頃には、14大司教区の下、司教77人、司祭1万2千人、カトリック人口は1千万人を超えていた。ヨーロッパからの宣教師によって支えられていたアメリカの教会が、20世紀、成熟の道を歩む過程で重要な役割を果たしたのが修道会である。そして、成長したアメリカの教会に期待されたことの1つは海外宣教であった。1904年、信仰公布会に寄せられた募金額は10万ドル、1919年には100万ドルを超えた。<sup>(5)</sup> 宣教師たちは、基礎が築かれてきたアメリカの教会の義務として、国内は言うまでもなく、海外宣教を活発化させることに力を注ぎ始めた。アメリカからの最初の海外宣教は1842年リベリアであったが困難を極めた。その40年後になって、中国、ハワイなどに宣教師が送られた。1909年神言会がイリノイ州テクニーにセントメアリー宣教師の家を設立し、ここが合衆国最初の外国宣教研修センターとなった。<sup>(6)</sup> こうして成長してきたアメリカ・カトリック教会は海外宣教をアメリカの責務であると考えようになってきた。また、1889年アメリカの聖職者位階制と成立100周年に際し、英国のハーバート・ヴォーン司教はアメリカの教会に書簡を送り、「アメリカの教会も、教会の一大事業である海外宣教に参加する時期が来ているのではありますまいか。—以下省略—」<sup>(7)</sup>と書き送っている。

この大きなうねりとヨーロッパの教会の期待に答えるべく、1911年6月29日、アメリカ人の二人の司祭、Father James Anthony Walsh (ボストン大司教区、マサチューセッツ州) と Father Thomas Frederick Price (ローリー教区、ノースカロライナ州) によって、メリノール宣教会 (Maryknoll, Catholic Foreign Mission Society of America, New York) が創立されたのである。その後、メリノール宣教会は、第一次世界大戦により数年遅れたが、1918年、共同創立者Fr. Thomas F. Price<sup>(8)</sup>を含む最初の宣教師4人を中国に向けて派遣した。

## 2. メリノール宣教会共同創立者と早坂司教の出会いの経緯

5年余におよぶウルバノ大学 (ローマ) での学業を終え、1911年6月10日、聖ラテラノ大聖堂において叙階されたばかりの新司祭早坂久之助神父は、メリノール宣教会創立の最終手続きとピオXI世の祝福を受けるためにローマに滞在していた2人の共同創立者James A. Walsh神父とThomas F. Price神父と摂理的な出会いをした。海外宣教、特にアジア諸国の宣教を最大の目的として創立したメリノール宣教会共同創立者達とその会員達は、この若き日本人の司祭から目を離すことはなく、帰国後の司牧と日本のカトリック教会での役割を見守り、支え続けたのである。Maryknoll Mission Archives (メリノール、ニューヨーク) にはWalsh総長と早坂神父の書簡、はがきなどが多く残されている。時系列に沿わないが、メリノール宣教会誌 “The

*Field Afar*”の司教叙階の祝賀の記事(1927年11月)から最初の出会いとその後の関係の経緯を紹介する。

日本人として最初の司教、早坂久之助司教に心からの祝意を送ります。本誌が読者に届く前に、ローマ教皇自らの手によって、ローマにて司教に叙階されたでありましょう。メリノールは古き友人として早坂司教を歓迎することができることは喜びであり、また光栄なことでもあります。メリノールの二人の創立者がアメリカでの宣教を始めるためにローマを出発しようとしていたその時、神学の課程を終え叙階されたばかりの若き日本人の早坂神父は日本に向けて出発しようとしていました。まさに東洋と西洋が摂理的な出会いがありました。その後、メリノール宣教会総長の初めての東洋への旅の際、仙台で早坂神父の家族を訪問する機会がありました。

若き司祭が日本に帰国後16年経ったときには、その司祭は教会で重要な責任を負って立派な司祭生活を送っていました。早坂司教は日本のカトリック教会の中で見事にカトリック教会を代表し、しばしば困難なところとみなされていた地域で、実りの多い結果を引き起こさないではいられない熱心さの模範を示していました。<sup>(9)</sup>

さらに家族との出会いについての記事を、“*The Field Afar*”(1928年3月)から要約する。4年後(1915年)メリノール宣教会Walsh総長が仙台にベルリオーズ司教(Bishop Berlioz)を訪ねた。その時には弟神父(久兵衛神父)もともに函館教区で司牧に励んでいたが、残念ながら「呼ば聞こえる距離」にいたわけではなかった。しかし、Walsh総長はベルリオーズ司教の近く住んでいた両神父の両親に会う機会があった。<sup>(10)</sup>

時を戻して1916年12月8日のメリノール宣教会Walsh総長あての書簡の内容を紹介する。時を経た3ページにわたる手紙である。More than five years have already passed away since we met for the first and last time. (はじめてそして最後にお会いしてからもうすでに5年以上がたちました。) その同じ手紙の中に、*The Field Afar* which you have had kindness to send me also, is renewing my memory every month to think of you and of your grand Apostolic work. (あなたが親切にも送ってくださっている*The Field Afar*は、あなたとあなたの壮大なる宣教活動について思いを寄せ、毎月私の記憶を新しくしてくれます。) 前年と思われる両親との出会いについては触れられていない。続けて宣教の第一歩となる神学校の設立に祝意を送っている。<sup>(11)</sup>

次の1917年3月の絵葉書の短い文章には、I have heard from my Bishop that you had kindness to give me some mass intentions in your last letter to him. I am much obliged to you. ((ベルリオーズ)司教様への最近の手紙にミサの意向(ミサの謝礼)をご親切にも送って下さいましたことを司教様に伺いました。大変ありがたく思っております。)<sup>(12)</sup>と書かれている。

気仙沼天主堂からの自筆の手紙やはがきで、懐かしい「永遠の都」ローマでの出会いのことを思いだしながら、メリノール宣教会からの財政的な援助に対する配慮に感謝を表している。この手紙にはまた「住んでいる気仙沼の人口はおおよそ8000、そのうちカトリックは数百人しかいないので、この小さな群れを数倍に増やして下さい、またその1人ひとりが忠実な羊

でありますようにと祈っていること。」を報告している。<sup>(13)</sup> また、弟神父が昨年同じくローマで叙階されて、小河原教会の神のぶどう畑で司牧に励んでいることが幸せなことであると喜んでいることも知らせている。気仙沼に来ている理由は、この時はすでに第一次世界大戦の最中にあり、フランスの宣教師達が帰国を余儀なくされているからであることが書かれている。<sup>(14)</sup>

メリノール宣教会の正式な来日宣教は1933年であるが、早坂神父からの書簡も含め日本の文化、カトリック教会の状況及び情報収集は、日本語習得、アジア諸国及び米国での日本人ミッションを通して数年前から粛々として進められていた。早坂司教との交流はそのなかで重要な役割を果たしていたといえるであろう。メリノール宣教会本部のニューヨークでWalsh総長を補佐し、1923年に平城（北朝鮮）、1925年には満州へ派遣されたパトリック・バーン（Patrick J. Byrne）師（後の1937年京都初代教区長、1949年韓国初代教皇使節）との関係も特記すべきことである。司教叙階の正式な挨拶状が送られているので、特別な関係であったと考えられる。師は太平洋戦争中、会員の中でただ一人京都・高野教会で軟禁状態におかれ、終戦後、カトリック教会の戦後処理に枢要な役割を果たした人物である。さらにまた1946年7月、ローマ教皇ピオ12世に派遣されたアメリカからの日本の教会の戦災視察団オハラ司教とレデイ司教の視察に同行し支援した。長崎に同行したという正確な記録は見つからないが、視察団とともに仙台に引退していた早坂司教と会っている。原爆後の純心聖母会の再興に舞台裏から支援をされた人物として記憶にとどめなければならない。<sup>(15)</sup>

その後継続して出版された*The Field Afar*には、出発の折には、早坂被選司教本人にはまだ不確定であったアメリカ訪問と歓迎の準備が、アメリカではすでに始められていたことが記されている。

信仰公布会米国会長Msgr. William Quinnの招きにより、ヘイズ（Hayes）枢機卿はバハマ諸島への公式訪問と堅信式のため不在のため、ダン（Dunn）ニューヨーク補佐司教（Vicar-General）を代理として、日本大使館関係者、カトリック日本人コミュニティ関係者とともに準備が粛々として進められていた。<sup>(16)</sup>

また、早坂司教のヨーロッパ諸国での歓迎の様子、特にフランスでは、パリ外国宣教会（La Société des Missions Etrangères）のSpiritual Child（霊的な特別なこども）として温かい歓迎を受けていることがNCWC News Serviceローマ駐在の通信員Msgr. Enrico Pucciから随時報告されている。その後のNCWC News Serviceからの記事は、早坂司教の逝去の報まで続いている。

新聞社名の記載のない興味深い小さい紙片の記事（縦7センチ、横5センチ、手書きの日付は1927年10月3日）がアメリカ・カトリック大学アーカイブに保管されている。「早坂被選司教にはティリー司教（Bishop Fernand Thiry）が同行することになっていたが、急病により一人での出発を余儀なくされた。」<sup>(17)</sup>とあるが、しかし、当のティリー神父は、同年7月被選司教の任命を受けて、12月11日に長崎で司教に叙階されているので、「急病により」と同時に、本人の司教叙階により早坂被選司教の同行は不可能であったことであろう。しかしティリー司教はその2年5ヵ月後帰天している。緊急事態の中で短時間に相応しい同行者は間に合わなかったのではないだろうか。

以上の事情により、Walsh総長は一人で出発した旅行中の早坂司教の秘書的役割を果たすこ

とになり書簡が多く残ることになった。便利な通信手段もなかった思われる中で、アメリカから米国パリミッションの本部、船上を結んだ旅程の連絡の文書、電報等が多く残されている。なかでも、“STATEMENT FOR BISHOP HAYASAKA”という文書には細やかな配慮が見られる。「文書を読んで、内容がそれでよいと思われれば、記者達はいろいろ質問してくるので、記者会見の席で配布するとよいでしょう。」という手紙を添えて、ニューヨーク到着の日に、使いの者に船上に届けさせている。<sup>(18)</sup>

Walsh総長は、1933年6月、主司式者にフマソニ・ビオンディ枢機卿（駐米教皇使節）（Cardinal Fumasoni Biondi）、共同司式者にDunn補佐司教により司教に叙階された。1936年逝去したが、それまでの間早坂司教との交流、日本の教会への支援は続いた。

### 3. フマソニ・ビオンディ大司教（Archbishop Fumasoni Biondi） （駐米教皇使節）、ウルバノ大学学友と早坂司教

早坂司教の米国訪問の実現を語る際の最も重要な理由の1つは、ウルバノ大学の恩師フマソニ・ビオンディ大司教（Archbishop Fumasoni Biondi）が駐米教皇使節として、ワシントン D. C. に滞在しておられたことである。早坂司教のウルバノ大学時（1905-1911）の師であり、日本における教皇庁使節館設置の初代駐日教皇使節として1919年に着任し2年間日本に滞在した。その後1922年1年の信仰公布会長官を経て、1922年から1933年まで駐米教皇使節として米国に滞在することになる。

一方、当時の早坂神父は、函館教区の司祭として献身的に司牧に励み、恩師である駐日教皇使節に親しくあう機会もあったであろう。1921年、初代駐日教皇使節の離任後、マリオ・ジャルデーニ大司教（Archbishop Mario Gardini）が新駐日教皇使節として着任し、早坂神父は教皇使節秘書官の任命を受けた。1925年まで教皇使節に随行して、補佐しその重責を果たした。Walsh総長のことばにもあるように、さらに恩師フマソニ・ビオンディ（Fumasoni Biondi）駐米教皇使節も、「日本のカトリック教会の中心にあって、堂々と大任を果たしている早坂神父の動向を、喜びをもって見守っていた。」<sup>(19)</sup>

その喜びを表すかのように、Washington Star Photo（新聞の写真）によれば、メリノール Walsh総長、Rev. KaluznyらとともにUnion Station（Washington, D. C.）に到着した早坂司教は、教皇使節フマソニ・ビオンディ大司教ご自身がMsgr. Marella<sup>(20)</sup>、岡本季正氏（日本大使秘書官）、Msgr. Leechを伴って出迎えられるという榮譽に浴している。

早坂司教米国訪問を語るに際して、教皇使節フマソニ・ビオンディ大司教（Archbishop Fumasoni Biondi）とともに重要な事柄がもう1つある。それは、勉学を共にし、1911年6月10日、ローマラテラノ大聖堂で同時に司祭に叙階されたアメリカの学友司祭達が多数いたことである。バッファローでは16名が祝賀の席に参集したと書かれている。学友のうち2人はすでに司教に叙階されていた。John A. Floersht司教（1923年司教叙階、ルイーズビル、ケンタッキー州）とBishop White（スポーケーン、1910年9月24日司祭叙階、イエズス会）である。残されている手紙では、Floersht司教は所用のため再会はできなかった。バッファロー教区で主任司祭をしていたカルッシュニー神父とポーランド神父は、バッファローでの歓迎や同窓生の再会を計

画した。聖アダルベルト教会学校の子供たちが日本語の歌で歓迎し、早坂新司教を大変驚かせたそうである。17年ぶりとなった再会は大きな喜びとなり、留学時代の話に花が咲いたようである。地域の新聞には早坂司教の留学時のエピソードも含まれている。ちなみに、「早坂司教は、小さいけれど英語は堪能、六言語を話し、スポーツマンで、野球ではいつもキャッチャーを務めていた。」常にリーダーシップをとっていたようである。<sup>(21)</sup>

以上の状況から、早坂新司教の米国訪問は、カトリック教会としてのアイデンティティを確立し成熟してきた米国カトリック教会の海外宣教への決意の具現化、そして、早坂司教の人柄を包むグローバルな人的絆の見事なラポール（rapport：調和のとれた信頼関係）によって、必然的に盛大な歓迎となったと考えられる。当時のカトリック教会をふくむアメリカ社会の日本に対する悪い印象を取り除くほどの訪問であった。<sup>(22)</sup>

#### 4. 早坂司教の米国における足跡と資料

昭和3年(1928年)2月-3月 (うるう年)		資料
1928 2/8 (水)	Le Harve French Liner: De Grasse ルアーブル港出発 デ・グラッセ (当時最も有名なフランスの旅客船：乗客255+同行者) 午後9時30分 乗船	Passenger's Lists 乗客番号：80
2/17 (金)	ニューヨークNew York 午後7時 West 15 <sup>th</sup> St. De Grasse の主な乗客名簿の最初に早坂司教の名前が記載されている。 ***** 公式訪問と堅信式のためにバハマ諸島に滞在中のヘイズ枢機卿 (Cardinal Hayes) に代わりダン補佐司教 (Bishop Dunn) が埠頭に出迎え。 Msgr. Quinn (信仰公布会米国会長) は米国内歓迎責任者として出迎え。 Msgr. John F. Glavin (Albany, N.Y.) は米国信仰公布会を代表して早坂司教米国訪問の全行程に同行する。 ニューヨーク市長・ウォーカー氏 メリノール宣教会Walsh総長 司教5~6名、新聞記者、市内の名士、15邦人の出迎えを受ける。 夜：船上での夕食会: Supper aboard the steamer 宿泊：モンセニョール・クイン (Msgr. Quinn) の客となる。 109 East 38 Street	到着日 船上の写真 写真資料(8) この写真が他紙に配信されている。 The Catholic News, 新世界 (SFの日本語新聞) に掲載されている。
2/18 (土)	終日新聞記者との会見、訪問者の挨拶を受ける。 記者会見用の“STATEMENT”の文書はWalsh総長が書き、船上に届けさせたものである。(文書の内容は訪問先の新聞に引用が見られる。特に日本の教会の迫害の歴史、1865年3月17日の「潜伏キリシタンの信徒発見」を伝える新聞が見受けられる。)	記者会見の文書はWalsh総長が書く。(文書、手紙あり)
2/19 (日)	午前11時 聖パトリック (St. Patrick) 大聖堂で荘厳ミサ モンセニョール・クイン (Msgr. Quinn) ダン補佐司教 (Bishop Dunn) メリノール総長Rev. Walsh モンセニョールM.ラベル (聖パトリック教会主任司祭) カルシュニ (Kaluzny) 神父 (バファロー教区早坂司教親友) イエスキュー (Lawrence A. Yeske) 神父S. M. (マリア会北米東部管区長) Msgr. John F. Glavin (Albany, N. Y.) 信仰公布会 Msgr. Thomas J. Leonard (Brooklyn, N.Y.) Rev. Thomas J. McDonnell, (大司教区信仰公布会担当, Mass 式長) 3000余名出席 (日本人300人) ニューヨーク州知事：アルフレッド・スミス氏 ニューヨーク市長ウォーカー氏、内山領事夫妻 ミサ後、Msgr.ラベル主催の昼食会、その後付属高校生による「みかど」の上演を鑑賞する。 ニューヨーク大司教区立聖ヨゼフ大神学校 (Dunwoodie, N. Y.) 訪問、説教	ミサ直後の写真 写真資料(5)  Msgr.Quinnの説教 “Japanese Bishop Officiates at the Cathedral” The Catholic News, February25, 1928

<p>2/20 (月)</p>	<p>Jerome Greene 師: Protestant Minister プロテスタント牧師 (日本生まれ) Mr. John La Farge: Great Grand-nephew of Commodore Perry (ペリー総督の甥の孫) India Club メリノール本部訪問 (Walsh総長): メリノール, N. Y. Evening: to Washington, D.C. 夜: ワシントンD. C. に向かう</p>	<p><i>The Field Afar</i>に記事多数,</p>
<p>2/21 (火)</p>	<p>Washington, D. C. 出迎え (同行者) ビオンデイ大司教 (駐米教皇使節), Msgr. Marella, 岡本季正氏 (日本大使館) Rev. M.Walsh, Msgr. G.L. Leech, Rev. Kaluzny ***** Archbishop Pietro Fumasoni-Biondi (フマゾニ・ビオンデイ大司教) The Apostolic Delegate (駐米教皇使節) 早坂司教恩師 Rev. John J. Burke (NCWC : General Secretary) ***** 駐米日本大使主催昼食会: Luncheon by Japanese Embassy 松平恒雄大使, 岡本李正氏 (大使秘書官), 澤田氏 (領事) ***** Visit to the Headquarters of the National Catholic Welfare Conference : NCWCの後アメリカ司教協議会へ Rev. John J. Burke (NCWC : General Secretary) ***** ローマ教皇庁駐米教皇使節 Archbishop Pietro Fumasoni-Biondi訪問 駐米教皇使節主催晩餐会 主な主席者: Leopoldo Ruiz y Florez大司教 (Morelia大司教, メキシコ) Rev. John Burke (NCWC General Secretary) Msgr. James H. Ryan, (NWC, Executive Secretary), メリノール総長 Rev. M.Walsh 岡本李正氏, 澤田氏 (日本大使館) ワシントンD. C. 泊</p>	<p>出迎えの写真 Washington Star Post  ポートレート 写真資料 (9) 日本大使公邸にて (Washington,D.C.)</p>
<p>2/22 (水)</p>	<p>ローマ法王庁大使館チャペルにて堅信式 受堅者: 岡本李正氏夫人, 澤田領事令息二人 日本倶楽部歓迎晩餐会 内山領事, 他出席者50余名</p>	
<p>2/23 (木)</p>	<p>午後3時 ニューヨークに戻る 午後7時日本倶楽部歓迎晩餐会: 日本倶楽部 (Japan Club) 主賓: 早坂久之助司教 陪賓: ウォルシュ師 (東洋傳道學校校長, メリノール総長) Msgr.クイン師 (信仰弘布会米国会長, 歓迎責任者) 司会: 柏木前会長, 歓迎の辞: 内山領事 主な主席者: Leopoldo Ruiz y Florez大司教 (Morelia大司教, メキシコ) Rev. John Burke (NCWC General Secretary) Msgr. James H. Ryan, (NWC, Executive Secretary), 岡本李正氏, 澤田氏 (日本大使館) 徳田, 瀬川, 青木, 四本, 濱地, ギツプス諸氏 (信徒), 柏木正金支店長, 高見ドクトル, Japan Society の代表者, 地主森村支配人, 東 (住友), 高木 (三銀), 風間 (三菱), 冷牟田 (鮮銀), 道面鈴木, 黛原合名各支店長, 草信日本人會会長 (万歳三唱), 原口大蔵事務官他50余名</p>	<p>カトリックタイムズ記事 (5/1/1928)  米国新聞記事 (紙名不詳) より</p>
<p>2/24 (金)</p>	<p>バッファロー (ニューヨーク州) へ</p>	
<p>2/25 (土)</p>	<p>午前8時バッファロー市到着 Rev. Campo (信仰公布会), カルッシュニー神父同行 バッファロー市長シュワブ (Frank X Schwab) 氏表敬訪問「市の鍵」が 贈呈される バッファロー司教区ウイリアム・ターナー司教 (Bishop William Turner) に挨拶 公邸: Episcopal Mansion, Delaware Ave. A Brief Interview by "The Times": Time誌によるインタビュー 出迎え: Rev. Link (信仰公布会, バッファロー地区),</p>	<p>新聞記事多数  Buffalo Evening Times (2/25/1928) 当新聞記事には早坂司教の ローマ時代のエピソード等 が二人の親友によって語ら れ, 温かい取り扱いになっ</p>



	<p>Rev. Stanislaus KroczeK (St. Josaphat' Church Cheektowaga) ,                  Rev. Ignatius Wojroheweki, Rev. Peter Melerski (St Adalbert Church,                  滞在：聖アダルベルト (Adalbert) 教会司祭館泊,                  主任司祭カルッシュニー神父 (Rev. F. Kaluzny) とRev. John. P. Boland                  (St. Lucy's Church) は早坂司教のローマ留学時代の親友で同時にローマ                  で司祭に叙階された。(1911年6月10日) 17年ぶりの再会となる。                  Buffalo 市はポーランド, イタリアからの移民が多いカトリックの町</p>	<p>ていて興味深い。友人16名                  氏名も記載されている。</p>
2/26 (日)	<p>午前10時半 聖アダルベルト教会で荘厳ミサ                  午後：聖ヨゼフ大聖堂にて聖体降福式, 講演                  ウィリアム・ターナー司教公邸 (Delaware Ave.) へ                  Rev. Nelson H. BakerのBasilica (バジリカ:Our Lady of Victory) ,診療所,                  養護施設等の福祉施設視察 (Lackawanna)                  The Sisters of St. Francis (Pine St.) 本部訪問 講話                  The Sisters of St. Joseph (Mt. St. Joseph) 本部訪問, 講話                  Niagara University (1883年創立, ヴィンセンシオ会) 訪問, 学生に講演</p>	<p>ベイカー神父は, 庭に噴き                  出た天然ガスの精製設備を                  建て, 資金を作り福祉施設                  を運営し, 壮麗なバジリカ                  を建設。現在福者にあげる                  動きがある。</p>
2/27 (月)	<p>聖アダルベルト教会学校の30名の少女たちによる日本語による歌,                  - Long Life to Japan - (英語の意味:「君が代」と推測 (濱田)) で歓迎。                  カルッシュニー神父主夕食会:ターナー司教, 教区司祭団, 他市内名士ロー                  マ時代の友人主体の夕食会 (学友16名各地から参集)                  (この席上, 早坂司教はアメリカ人司祭, 修道女の日本への派遣を依頼する。                  またRev. Link は早坂司教のためにカリスや祭服なども含め, 寄付を呼び                  掛けていることが記されている。) *16名の氏名省略</p>	<p>Rev. John. P. Bolandは 戦                  後, 労働問題の専門家とし                  て日本を訪問し, 1ヵ月滞                  在し, マッカーサー元帥を                  補佐した。</p>
2/28 (火)	<p>デイトン市到着午前8時半 (汽車) 滞在は7時間                  “Vivat Pastor Bonus” の歌で マリア会Mount St. John修道院に迎えられ,                  続いてミサ, Rev. Elbert 補佐, 聖歌 ‘O bone Jesu’, 歓迎式：早坂                  司教は会員に感謝を述べ, またユーモアと率直な話は感銘を与えた。                  急病のイエスキュー (Rev. Yeske) 管区長を病室に見舞って挨拶                  *****                  デイトン大学 (University of Dayton,1850年創立, マリア会)                  オーレイリ学長, Msgr. Daniel Buckley (バックレイ)                  ジョン・キャロル氏 (学生：英語歓迎スピーチ)                  住田幸一郎氏 (神戸からの留学生：日本語歓迎スピーチ)                  レセプション：シンシナチ大司教John T. McNicholas, オーレイリ学長：                  Msgr. Daniel Buckley (バックレイ), 全デイトン教区司祭達参集                  *****                  午後3時：Daytonに滞在中のシンシナチ大司教John T. McNicholas                  に伴われ車でNorwood (シンシナチ) へ                  神学校とCrusade Castle でレセプション                  同日夜 汽車でシカゴへ出発</p>	<p>ヨーロッパ歴訪中, 早坂司                  教はマリア会5ヶ所を訪問                  しており, 米国での歓迎は                  ベルギー・マリア会本部総                  長からの依頼によるもので                  ある。</p> <p>住田幸一郎氏は, 後に実業                  家として活躍 (台湾コー                  ヒー栽培, ハワイのSumi-                  da酒造)</p> <p>写真：写真資料(7)                  The Daytonian誌</p>
2/29 (水)	<p>Chicago (シカゴ) 同行：Msgr. John F. Glavin, Rev. H. Campo                  出迎え：Rev. James J. Horsburgh (大司教区信仰公布会担当)                  Cardinal Mundelein (マンデライン枢機卿) 不在につき, Bishop Hoban                  訪問</p>	
3/1 (木)	<p>Bishop Hoban司教に伴われて, マンデライン (Mundelein) 教区立神学校,                  Mission House (神言会神学校, テクニー) 訪問</p>	<p>自筆サインがマンデライン                  教区立神学校に残されてい                  る。</p>
3/2 (金)	<p>シカゴ</p>	
3/3 (土)	<p>汽車でロスアンジェルスへ</p>	

3/4 (日) LA	<p>午前9時半 ロスアンジェルス着 (Southern Pacificエスピー線) Msgr.グラービン (Msgr. John F. Glavin) 同行。 礼装の出迎えを受ける ナイト・オブ・コロンプス代表者6名 (市内名士, プオックス, バーセル加州上院議員) 市長代理, 市内司教, カトリック関係者, 警察署長代理, エスピー鉄道幹部, 第145ボーイスカウト中村日會長, 葛西書記長, 両新聞社同胞, カトリック信徒数十名に構内で出迎えを受ける。他総勢数百名の出迎え。 写真撮影 信徒, メリノール校生徒に迎えられ, 警官隊に護衛されて大聖堂へ。 午前10時半 荘厳ミサ 午後1時 歓迎午餐会: アンバサダーホテル 午後3時 接見会: メリノールホール 夜: 信者主催晩餐会 (メリノール司祭館)</p>	<p>写真あり (Web) University of Southern California アーカイブに写真多数保存  (ロスアンジェルス日程は『羅府新報』より)</p>
3/5 (月)	<p>午前10時メリノールスクール訪問 (在學生, 卒業生参集) 少年少女クラブ員による餘興 午後: 教育事情視察 夜: ロスアンジェルス大司教公邸 (サウス・バーリントン) にて歓迎会 カントウエル大司教 (Archbishop John Joseph Cantwell) サンデイエゴの司教, 他米国側有力者12名, 水澤領事出席</p>	
3/6 (火)	<p>午前8時メリノールホーム聖堂でシスターのためのミサ 午前8時半川村領事官補令嬢 (2ヵ月) の洗礼式 正午: カトリック男子ニューマンクラブ主催歓迎午餐会 (市の有力者及び有志と接見) 午後: レビーリー師 (メリノール) の案内でオールド・ミッション見物 午後8時メーン2街の聖ビビアナ大聖堂にて45名の日本人に堅信の秘跡を授ける。(早様司教が執り行う初めての堅信式となる。) * 英語の講話の後, 聖体降福祭を行う。</p>	<p>*2/22 ローマ法王庁大使館チャペルにて堅信式が行われている。</p>
3/7 (水)	<p>午前: 大司教の案内で市内教会訪問 午後: カトリック婦人会の歓迎会に出席, 講話 午後7時: メリノール校 (ヒウイット街226) にて, 日本人カトリック会主催: 羅府日會後援歓迎講演会 (案内状700通) 早坂司教講演, 歓迎の辞は領事と日會の代表者 (司教の講演主体)</p>	
3/8 (木)	<p>午前7時45分エスピー線にてサンフランシスコに向けて出発 午後7時45分サンフランシスコ到着 大司教代理サリバン師, ストック (Stoecke) 師 (日本人教会主任, 神言会), ケラー師 (メリノール) 他多数の出迎え</p>	<p>ここまで羅府新報</p>
3/9 (金)	<p>聖マリア大聖堂にハンナ大司教 (Archbishop Hanna) 訪問 同大司教の案内によりサンタクララ大学 (イエズス会, サンタクララ: コルコリアス総長), 同大司教区立聖パトリック神学校 (メンローパーク), スタンフォード大学 (パオアルト) を訪問 聖フランシスコ・ザビエル教会 (日本人教会) 宿泊</p>	<p>案内の車の運転は日本人教会創設メンバーの一人, 酒巻氏が務める。 日程は「新世界」より</p>
3/10 (土)	<p>午前8時ミサ, その後13名の日本人に洗礼を授ける。 (この中から, 司祭, 修道女が誕生している。) 午前9時イグナチオ大学 (イエズス会) 訪問, 総長と午餐 午後2時ナイトオブコロンプスホールにて講演, その後イグナチオ大学生による無言劇「長崎の殉教者」を観劇 午後4時接見会 午後6時ホイットカムホテルにて晩餐会 (ハンナ大司教, 他50名の司祭) その後「長崎の殉教者」の続きを観劇 (ナイトオブコロンプスホール)</p>	<p>サンフランシスコ大学アーカイブ</p>
3/11 (日)	<p>午前11時大司教区聖マリア大聖堂にて荘厳ミサと歓迎式 午後3時半日本人のための講演会 (日本人教会) 午後4時20分 海路フェリーにてポートランドに向けて出発</p>	

3/12 (月)	ポートランド, シアトル, スポーケーン	帰国直前にポートレイトを添えて、関係者に感謝の手紙を送っている。(3月15日付) 手紙はメリノールに、ポートレイトはシアトル大司教区公文書館所蔵
3/13 (火)		
3/14 (水)	シアトル：午後3時25分到着 メリノールチャペルにて22人の日本人に堅信式を行う (17 <sup>th</sup> Jefferson St.)	
3/15 (木)	午前10時St. James Cathedral 荘厳ミサ, Bishop O'Dea, Rev. Fisher (司教補佐), Rev. Lanigan (司教補佐) Msgr. Hanley, Msgr. Stafford, Rev. Corboy Msgr. Hanly, Rev. John Gallagher, Rev. Edwin Hayes, Rev. M. Beglin (式長), Rev. M. Rosol, (式長補佐), Rev. B. Cramer 侍者100人, 50人余の教区内の司祭団 州知事, 市長日本及び外国公館の関係者, 商工会議所関係者, 日本人会メンバー多数出席 Msgr. Glavinは説教の中で日本の教会史, 3月17日の「信徒発見の日」の出来事を取りあげ, 参加者に深い感銘を与えた。「東洋と西洋が教会の一致の中で融合した。」と大きく取り上げ, 盛大な歓迎を行った。 ***** 正午：Knight of Columbus & Japan Society 共催Civic Luncheon Hotel Sorrentoにて (以下主なゲスト) Bishop Hayasaka 主賓 Mr. John M. Harnan (乾杯の辞) Bishop O'Dea Judge Donworth (Chamber of Commerce:商工会議所代表) Mr. Sakurachi ( Manager of Yokohama Specie Bank) 日本人代表 Dr. Gowen, University of Washington and, President of the Japan Society Professor Mackenzie, President of University of Washington代理 ***** 夜：Japanese Association主催 Reception & Banquet 日本館にて	
3/16 (金)	午前7時55分 汽車でバンクーバー到着 ホワイト司教* (ウルバノ大学先輩, 学友, イエズス会) 訪問 (スポーケーン) 聖パウロ病院に宿泊予定	*1910/9/24 叙階
3/17 (土)	正午12:00バンクーバー発 エムプレスオブカナダ (Empress of Canada) にて日本に向けて出航	
3/29 (日)	横浜港入港 ローマ法王庁駐日教皇使節レイ大司教 (Archbishop Jean-Pierre Rey, M.E.P.) 東京大司教区シャンボン大司教 (Archbishop Chambon, M.E.P.) ローマでの叙階式では, 主司式者ピオXI世教皇をパリミッション 総長 Budes de Guebriant 司教と共に共同補佐を務める。 長崎教区代表として大崎神父, 深堀市太郎氏, 真田精一氏, 仙台教区よりデフレンス神父, 永井己之助氏上海より 一関より土井辰夫神父, 令弟：早坂神父 午後1時半 東京到着 在京の司祭, 信徒, 福岡教区代表者の出迎えを受ける 関口教会泊	パリミッションの正式名称 ：La Société des Missions Etrangères (M. E. P)

以上の早坂司教の旅程は、*The New York Times* (New York, N.Y.), *The Catholic News, Buffalo Evening Times* (Buffalo, N. Y.), *The New World*, (Chicago, Illinois), 『羅府新報』, 『新世界』, 訪問校, 訪問教区新聞, 現地新聞記事等の調査を通して作成したものである。氏名, 地名, 行事, 時間等に多少ずれがあること, また, 当時の旧仮名遣い, 旧表記はできる限り解りやすく書き換えたことを記してお断りしておく。

- (1) 『羅府新報』1903年にカリフォルニア州ロサンゼルスで創刊された日本語新聞  
戦争に翻弄された休刊を乗り越え再刊を果たし, 近年は経営危機もあるが, アメリカで最も多く講読されている日本語新聞(週4日発行), 国立国会図書館所蔵
- (2) 『新世界』はサンフランシスコの日本語新聞の中でも古い日本語新聞。YMCAの青年活動家が『新世界』(1894-1932)を発行, その後『新世界日日新聞』(1932-35)に引き継がれ, さらに『北米朝日新聞』『新世界朝日新聞』(1935-42)に引き継がれた。カリフォルニア・ファーストバンク日米資料室所蔵(1983年当時)現在はJapan Town資料室

最後に, 本研究は未調査の訪問地, 翻訳中の資料があり, 継続中であることを記しておく。

## 注

- (1) 書簡1927年8月21日付 Maryknoll Mission Archives所蔵 (Maryknoll, New York)
- (2) 『羅府新報』昭和3年1月29日 国立国会図書館所蔵
- (3) 『羅府新報』昭和3年2月19日 国立国会図書館所蔵
- (4) 1887年, ローマ法王庁の承認の下, 教皇レオXIII世の支援を受け, アメリカ・カトリック司教協議会によりワシントンD. C. に創立された大学。
- (5) J. T. エリス他著, 上智大学中世思想研究所翻訳・監修『キリスト教史』(平凡社ライブラリー, 2006年) 179
- (6) J. T. エリス他著, 上智大学中世思想研究所翻訳・監修『キリスト教史』(平凡社ライブラリー, 2006年) 180  
神言会: 1875年アーノルド・ヤンセン(2004年聖人)によってドイツに創立された男子宣教修道会。最初の宣教師ヨゼフ・フライナーデメッツ(2004年聖人)とジョン・アンJザーを中国に派遣
- (7) J. T. エリス他著, 上智大学中世思想研究所翻訳・監修『キリスト教史』(平凡社ライブラリー, 2006年) 179
- (8) 1919年香港にて病気のために帰天
- (9) *The Field Afar*, November 1927 Vol. XXI, No. 11, P273, Maryknoll Mission Archives所蔵 (Maryknoll, New York)  
*The Field Afar* (遙かなる畑): 米国のカトリック信徒に外国宣教に関する熱意を養うために「遙かなる畑」というタイトルでボストン大司教区司祭だったウォルシュ (James A. Walsh) 神父が出版していた雑誌 (メリノール宣教会HPより)
- (10) *The Field Afar*, March 1928 Vol. は不明, Maryknoll Mission Archives所蔵, (Maryknoll,

- New York)
- (11) 書簡Dec.8, 1916, Kesenuma Tenshudou, Miyagiken, Japan (気仙沼天主堂, 宮城県), Maryknoll Mission Archives所蔵 (Maryknoll, New York)
  - (12) 3 March 1917, Kesenuma Tenshudou, Miyagiken, Japan  
早坂司教自筆のはがき, Maryknoll Mission Archives所蔵 (Maryknoll, New York)
  - (13) 書簡Dec. 8, 1916, Kesenuma Tenshudou, Miyagiken, Japan気仙沼天主堂, 宮城県, Maryknoll Mission Archives所蔵 (Maryknoll, New York)  
( ) 内は筆者加筆
  - (14) 書簡Dec.8, 1916, Kesenuma Tenshudou, Miyagiken, Japan気仙沼天主堂, 宮城県, Maryknoll Mission Archives所蔵 (Maryknoll, New York)
  - (15) 濱田洋子「オハラ司教の遺産」『純心人文研究』第22号 (長崎純心大学平成28年) 135, 150
  - (16) 新聞記事 February 19, The New York Times, New York Public Library所蔵
  - (17) 新聞記事 October 3, 1927 新聞紙名不明, The Catholic University of America, The American Catholic History Research Center所蔵 (Washington, D. C.)
  - (18) Walsh総長の書簡 February 17, 1928と“STATEMENT”  
Maryknoll Mission Archives所蔵 (Maryknoll, New York)
  - (19) *The Field Afar*, March 1928 Vol. は不明, Maryknoll Mission Archives所蔵 (Maryknoll, New York)
  - (20) 新聞の写真(新聞紙名, 日付不明) Washington Star Photo, 純心聖母会所蔵
  - (21) 新聞記事 February 23, 1928, Buffalo Evening News, Buffalo & Erie County Public Library所蔵 (Buffalo, New York)
  - (22) *The Field Afar*, May 1928, Vol. XXI, No. 5, P.133, Maryknoll Mission Archives所蔵 (Maryknoll, New York)

本稿作成に関する資料収集に際し多大のご助言, ご協力を賜りました以下の関係の皆様へ深く感謝いたします。

Rev. M. Walsh, Archivist, Maryknoll Mission Archives (Maryknoll, New York)

Ms. Jane Stoeffler, Reference Archivist, The Catholic University of America, American Catholic History Center, (Washington, D. C.)

Brother Larry, North American Center for Marianist Studies (Dayton, Ohio)

Diocese of Buffalo Archives, Archdiocese of Seattle Archives

Archdiocese of Chicago Archives California First Bank, 日米資料室 (1982年当時)

Father LaFranbore, O. M. I. (オブレート会, Buffalo, New York)

酒巻正治・裕子ご夫妻 (サンフランシスコ在住)

その他多くの関係者の皆様へ記して感謝の意を表します。

写真・資料

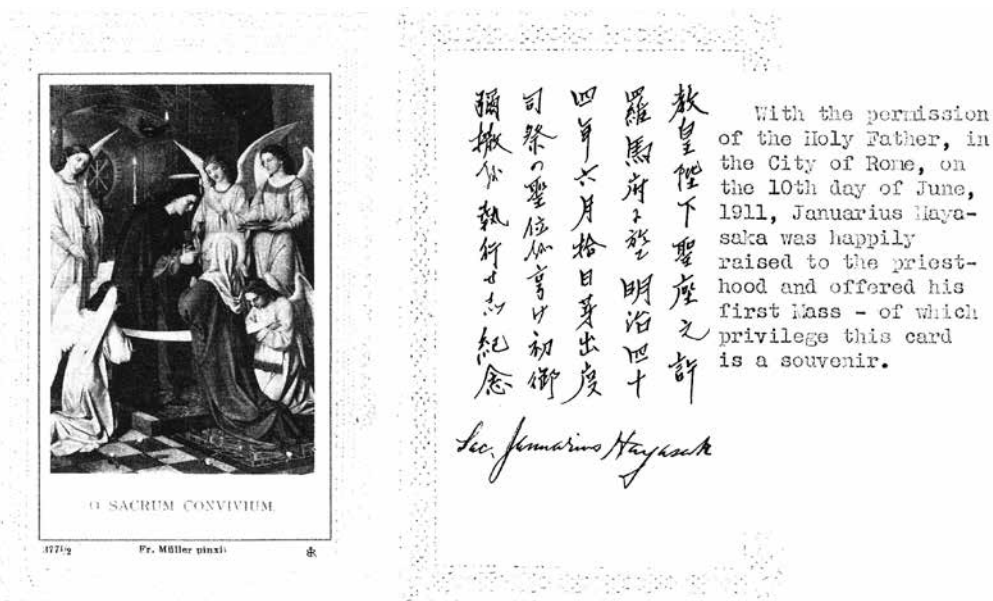


図1 司祭叙階記念御絵（聖画） 1911年6月10日  
 メリノール宣教会本部アーカイブ所蔵：Maryknoll Mission Archives  
 (Maryknoll, New York)



Murillo pinxit. 3505 Mignard Édit. Paris  
 L'IMMACULÉE CONCEPTION  
 O Marie conçue sans péché,  
 priez pour nous qui avons recours à vous.  
 (100 jours d'indulgence)  
 Imprimé en France

..... et Pontificalem gloriam non jam  
 nobis honor commendat vestium, sed  
 splendor animarum...  
 (Pont. Rom. De Cons. Epis.).

JANUARIUS HAYASAKA  
 E PONTIFICIO COLLEGIO URBANO  
 DE PROPAGANDA FIDE  
 IN FESTO CHRISTI REGIS A. R. S. 1927  
 AD SEPULCRUM BEATI PETRI APOSTOLI  
 PRIMUS INTER NIPPONIAE INDIGENAS  
 PER MANUS SSML. D. N. PII PP. XI  
 IN EPISCOPUM CONSECRATUS  
 NAGASAKIENSISQUE ECCLESIAE PRAEPOSITUS  
 EADEM QUAE SIBI CONLATA SUNT  
 POPULO SUO  
 ET UNIVERSAE ECCLESIAE  
 SPIRITUS SANCTI DONA ADPRAECATUR

図2 司教叙階記念御絵（聖画） 1927年10月30日  
 メリノール宣教会本部アーカイブ所蔵：Maryknoll Mission Archives  
 (Maryknoll, New York)

バーン神父宛 殿

一九二七年八月十五日

早坂久之助

ヤヌアリウス

謹啓 殘暑尙相去り難き折柄皆々様益々御清健の段慶賀の至りと存じ上げ候扱て私事不徳の身を以て去る七月羅馬教皇陛下より突然長崎教區司教たるの御任命を拜受致し候處皆々様の多大なる御同情を忝うし殊に愛熱に燃ゆる御祈禱を御恵み相成候へし事千萬難有茲に厚く御禮申上候思へば信仰の擁護者たる殉教者の聖地たる長崎教區に日本人最初の司教として今般御任命を辱う致候へし事不徳の身に取りと既に光榮の至りと存じ居候へし處 教皇陛下には尚ほ御自身羅馬府サンピエトロ大聖堂に於て十月三十日「王たるイエズスキリストの祝日」に際し司教叙階の聖式を御親授遊ばさるゝ御趣き仰せ出され候へし事重ね々々の御思召に對し只だ是れ感泣恐懼の外無之候  
 思ふに司教の職責たる其任や重且つ大にして教友諸兄弟の懇篤なる御同情と心ある御後援と加ふるに欣然賜はる御祈禱の力の背景なくんば容易に之を完う致し難き事御賢察の儀と存じ候扱ては其任に適はしき天主の聖寵の不肖の身の上に豊かからんやう今後とも益々熱き御祈禱の御援助を賜はり度く切願此事に御座候  
 九月一日正午日本郵船加茂丸にて神戸より愈々出航仕候に就ては一々拜趨御暇を御禮旁々右懇願の儀可然とは存じ候へ共何分唐突の際とて其機を得ず乍遺憾に紙上此段御挨拶に代へ申候尚ほ皆々様の上に天主の聖寵のいやまし豊かならん事を祈り且つ主と共日々御清健ならん事を願上候  
 敬具

図3 司教叙階を知らせる挨拶状

メリノール宣教会バーン神父宛て。バーン神父（後に司教，初代韓国の教皇使節）詳細は注<sup>(15)</sup>を参照。メリノール宣教会本部アーカイブ所蔵：Maryknoll Mission Archives, (Maryknoll, New York)

Photocopy from Maryknoll Mission Archives. May not be reproduced without permission.

+ Senda Mototeru-ji Tenshudo  
 21st Aug. 1927  
 Nagasaki

Dear and dear Father,  
 I thank you for your kind congratulations later for my episcopal nomination. Burdened with such a heavy and difficult responsibility, I can do nothing but to recommend myself to your fervent prayers. On my home way I may pass through Amal, so that I can sure to see to watch at Maryknoll. My best compliments to him if you please.  
 With my happiness & success  
 I remain yours faithfully  
 J.R. Hughes

図4 司教叙階の祝意に感謝するメリノール宣教会Walsh総長宛ての返信  
 メリノール宣教会本部アーカイブ所蔵：Maryknoll Mission Archives  
 (Maryknoll, New York) (アンダーライン加筆，筆者)



図5 セント・パトリック大聖堂におけるミサ後の記念撮影 1928年2月19日  
左から Msgr.ウイリアム・クイン (アメリカ信仰弘布会会長) ダン補佐司教 (ニューヨーク大司  
教区) 早坂久之助司教 Msgr. ラヴェル (セント・パトリック大聖堂主任司祭)  
メリノール宣教会ウォルシュ総長 純心聖母会所蔵

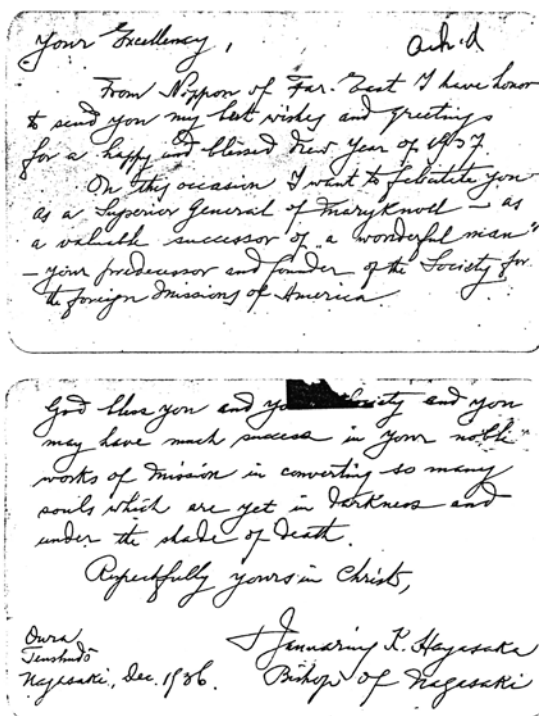


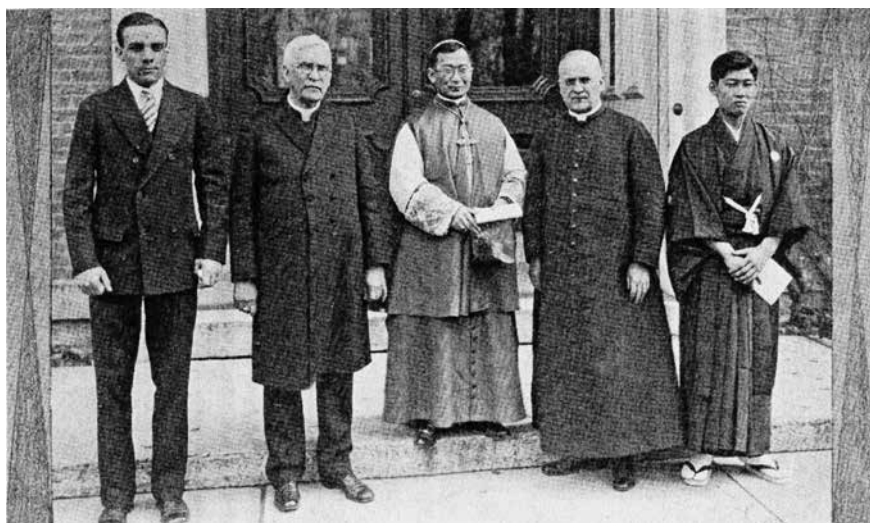
図6 メリノール宣教会総長宛てのクリスマスカード 1936年12月  
ウォルシュ総長は同年4月帰天したので新総長に送ったカード。  
Maryknoll Mission Archives所蔵 (Maryknoll, New York)





### Bishop Visits College on Way Home

First row, right to left-Rev. Dennis Halpin, Monsignor Daniel Buckley, Bishop Hyasaka Koichiro Sumida, Japanese student here who gave the welcome address in native tongue; Very Rev. Bernard P. O'Reilly, S. M. ; John E. Carroll, student who gave the Welcome address in English. Middle row, right to left-Rev. A.Gerdes, Rev. H. Taske, Rev. W. Tredtin, J. Wiegand, Rev. M. Varley, Rev. H. Campo, Rev. F. Luzny.



Above, reading from left to right-John Carroll, Monsignor Buckley, Bishop Hayasaka, President O'Reilly and Koichiro Sumida.

### 図7 デイトン大学 (マリア会), Dayton, Ohio 1928年2月28日

The Daytonian MCM XXVIII Vol. VIオハイオ州北米マリア会研究センター所蔵 (Dayton, Ohio)  
(原文のまま、氏名を見易くするために一部編集を加えた。筆者)



図8 ニューヨーク到着の日 1928年2月17日  
デ・グラッセ船上にて 純心聖母会所蔵



図9 日本大使館歓迎昼食会 1928年2月21日  
ワシントンD. C. 純心聖母会所蔵